

広島県立美術館

研究紀要

第22号

中央アジアのカード織りについて (1)

—広島県立美術館所蔵トルクメンの刺繍袋

およびウズベキスタン現地調査による— …………… 福田 浩子 1

資料紹介：南薫造の1930（昭和5）年の台湾日記と関連作品…………… 藤崎 綾 13

2 0 1 9

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.22

Card weaving in Central Asia: on Turkmen embroidery bags from the collection of
Hiroshima Prefectural Art Museum and Research in Uzbekistan *1*
FUKUDA, Hiroko Siddiqi

A Taiwanese stay diary in 1930 and related works of MINAMI Kunzo *13*
FUJISAKI, Aya

2019

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



口絵1



口絵2



口絵3



口絵4



口絵5

口絵1 《台湾風景》1930年 油彩・板
40.8×31.8cm 広島県立美術館蔵

口絵2 《台湾風景》1930年頃 水彩・紙
32.5×48.8cm 渋谷区立松濤美術館蔵

口絵3 《台湾風景》1930年 水彩・紙
32.0×48.2cm 広島県立美術館蔵

口絵4 《風景6》1930年頃 水彩・紙
30.8×46.4cm 広島県立美術館蔵

口絵5 《林本源邸》1930年 水彩・紙
23.3×31.5cm 広島県立美術館蔵

資料紹介：南薫造の1930（昭和5）年の台湾日記と関連作品

藤 崎 綾

はじめに

広島県立美術館では、南薫造（1883-1950・広島県呉市安浦町出身）に関わる資料を、御遺族に御協力を賜り調査している。筆者はこれまで、画業の展開上、注目すべき時代を中心に画家の日記原文を公表してきたが、本稿では、1930年の日記のうち、10月16日から11月17日までの約1か月を過ごした台湾での動向を書き留めた原文（本稿では「台湾日記」と記述）の主要部分を抜粋し、関連資料とともに紹介する。あわせて作品の取材地や制作時期についても可能性を含めて検討を行い、今後の同定作業のための基礎資料としたいと考える。

この年、南は、審査にも当たった第17回光風展や第17回日本水彩展への出品に始まり、3月1日からは日本水彩画会の懇親旅行で房州波太¹に、5月7日からは山形県の大石田にそれぞれ写生に出かけ²、また7月22日からは避暑に訪れた館山周辺で制作を行っている³。前年に続いて、東京工業大学で指導を行う一方、著書『水彩画の描き方』（崇文堂）も刊行⁴。展覧会場にもしばしば足を運び、松方コレクションの展覧に際しては、「ラファエリの老人（養老院）コロの婦人庭園ニ在る図、セザンヌの首く、りの家、及び風景、ゴーガンのタイチ女の流れの中の石に坐する裸形後ろ向きなど目立つ」など注目作品を書き留めている⁵。秋には、第10回帝展の審査員を務め、審査を終えた南は、台湾を目指して東京を出発。訪問の目的は第4回台湾美術展覧会（以下、台展と略称）⁶の審査であった。当時の南は、大正期から文展や帝展の審査員を歴任し、前年には帝国美術院の会員にも迎えられている。東京美術学校で岡田三郎助に学び、画家として歩み始めた南は、卒業後に渡欧。帰国後の明治末期より、滞欧作や郷里・瀬戸内に取材した作品で若くして文展での受賞を重ねた。画業の前半期を通じて官展で築いた確かなキャリアが、台展あるいは朝鮮美術展覧会の審査員就任につながったとも示唆されている⁷。ちなみに、台展の審査員選定に関わった東京美術学校長の正木直彦は、これに先立つ1928年の第2回台展において、すでに南を西洋画部審査員の候補としていたことが明らかとなっている⁸。実際には、正木は、「南薫造をと思ひしに（中略）南は帝展審査當役なればそれも六かし」⁹として、小林万吾が同年の審査員に就任したのだが、遠からず南を台展審査員に推す心づもりがあったことが想定されよう。

1930年の第4回台展審査に当たったのは、第1部（東洋画）が勝田蕉琴¹⁰、郷原古統¹¹、木下静涯¹²。第2部（西洋画）は、南のほか、石川欽一郎¹³、塩月桃甫¹⁴で、このうち、郷原、木下、石川、塩月は、大正期から台湾に住み、第1回台展から審査員を歴任しており、勝田と南が日本からの招聘組である。審査委員長は、台北帝国大学総長の幣原坦¹⁵が務めた。ちなみに、全10回開催された台展における西洋画部審査員の招聘組は、小林万吾、和田三造、藤島武二、梅原龍三郎ら、概ね同一人物が複数年、しばしば連続して選任されている。この傾向を踏まえると、翌1931年の第5回台展にも南の招聘が想定されていた可能性があるが、この年の夏、南は長男を病で亡くした後、傷心病臥しており、審査を引き受ける状況になかったのではないかと推測される。

関連資料：スケッチブック

台湾日記の記述を補完し、あわせて水彩や油彩作品との関連をもつ資料として、本稿の挿図にも使用しているスケッチブックについてここで略述しておきたい。現存する南のスケッチブックのうち、画中の書込みから台湾での使用が確認できるものは2冊あるが、大半は、縦18.4cm×横11.6cm（本紙サイズ：縦18.2cm×横11.2cm）の1冊（以下、スケッチブックAと記述）に収められ、もう1冊（同スケッチブックB、37.2cm×27.9cm、本紙37.2cm×25.9cm）には、数枚のスケッチが残るのみである。他の時期のスケッチブックの使用状況を見ると、南は必ずしも順序立てて使うことはせず、複数冊を同時進行で使用するほか、同一のスケッチブックにおいても、最初の頁から描き込んでいくかと思えば、後ろから遡って使うこともあるのだが、スケッチブックAは台湾滞在中の年記や地名のみならず、この1冊に収められている前後の時期の年記をたどっても、冒頭から順々に使用していった可能性が高い。よって、以下に掲載する挿図では、旅程に沿うと考えられるAの記載順も手がかりの一つとして制作時期や取材地を推定していくこととしたい。なお、一部図版は口絵でも紹介しているが、関連作品との比較の必要から、口絵の再掲を含め、全図版を挿図頁に掲載した。

旅程と制作

制作状況に注目しつつ、台湾旅行の旅程をたどってみよう（図19）。帝展鑑別最終日の10月12日、南は東京を発ち、翌日、神戸から吉野丸に乗船している。門司や上海沖を通り、16日に台北に到着。審査員の勝田とは神戸から同船で¹⁶、石川とも上陸直前に船で顔を合わせた。南は、石川とともに、1913年の日本水彩画会結成時のメンバーである。翌17日には展覧会場に赴いた後、審査委員長・幣原坦の官舎で行われた審査打合せ会に出席。18日・19日の両日で560～570点の作品を審査し、79点を入選と決している。

10月21日には淡水を訪問。一度、台北に戻るも、翌22日に台北の宿である日の丸館¹⁷を引き上げ、11月4日に再び台北に移るまでの2週間を淡水で過ごしている。同地滞在中は、反日武装蜂起である霧社事件が起こるなど、不穏な社会情勢が報じられたが、淡水には大きな影響は及ばなかったようで、石川や塩月ら西洋画部審査員との交友や地元の画家に連れられての祭礼見学、また公会堂¹⁸やジャンク、海景を描くなど落ち着いた日々が記録されている。淡水は、台湾滞在中、最も長く過ごした場所であり、日記にも日々創作の記述が認められる主要制作地である。訪問当初の作例としては「昭和五、十月廿三日 淡水」の書込みのあるスケッチが確認できるが（図1）、同作との構図上の類似から、《台湾風景》（口絵1／図2として再掲）も淡水風景の可能性が考えられる。また、スケッチブックAにおいて、図1の次々頁にあるのが、高台から家並と海を臨んだスケッチ（図3）で、これに構図や建物の外観に近い2点の水彩画（図4・5／口絵2・3）と油彩画1点（図6）が現存する。スケッチブックA中の図1・3の近接する位置関係から、また、同地滞在中の日記にある「がけ下の白い家を水彩にて画く」（10月28日付）との記述と関連がある可能性も含め、図3～6の4作品は淡水の風景を描いたものとひとまず推定しておきたい。南は後に台南の風景に接した際、「平地と場所が広い為め淡水とは亦た別箇の面白る味あり」（11月12日付日記）と記しているが、折り重なるように密集した家並や木々、また高低差のある地形が生む変化に富んだ淡水の情景に目を留め、その特色を表現しようとしたものと思われる。他にも、画題は特定できないものの、同地での水彩の作例（図7）が確認できる。

画中に「昭和五年十一月 於淡水」の書込みがあり、『みづゑ』316号（1931年6月）に掲載された図版と比較する限りでは、本作は同年の第18回日本水彩展に出品した《廟の門》と思われる。同誌のなかで南は、「淡水に於ける或る廟の門」を描いた本作について、「昨秋寫せる」もので「此の建物はさして古いものではないが」「一體に臺灣と云ふ處は建物でも其他でも、物を甚だ早く古色付ける處と見へ」と述べている。また、図版が確認できる同地での他の作例として、現存は未確認ながら、1932年の第19回日本水彩展に出品した《淡水》（図8）なども知られ、取材風景をもとに帰国後も制作を行うなど、収穫の多い滞在地であったことが知れる。

11月4日に台北に戻った南は、翌日高尾に出発し、同地で山田新吉らの出迎えを受けた。翌6日は山田らとともに高尾山に登り、対岸の旗後（旗津半島）にも渡っている。趣ある町の佇まいや旧砲台から見る海景に目を止め、以後も数日、旗後に渡り制作を続けた。「十一月七日 高尾渡船場」の記述のあるスケッチ（図9）は、サンパンと呼ばれる小型の通い船や船着き場に佇む人々を描き、早朝から岸壁に出かけてハンドスケッチをしたとの同日の日記内容に沿うものであり、名所や旧跡ばかりでなく市井の人々が営む日常風景にも関心を持って描いた作者らしい視点を感じさせる。前日6日の日記には、青い海に映える朱体のサンパンやジャンク、外洋から訪れる帆船や汽船など、さまざまな船が行き来する生き生きとした港の描写が色彩豊かに記され、水辺の情景を愛した画家にとって一際印象深い眺めであったことが伺える。11月8日付の日記にも「旗後に渡り 船着き（煉瓦家を一寸入れて）場を八号二画く」とあるが、煉瓦造の建物の一部と、サンパンやジャンクの停泊する渡し場の描写から、図10のような作例が想定される。本作は、画家の手になると思われる、作品写真を集めたスクラップブックにその図版が収められたもので、現存は確認できないものの、画家自身、納得の行く出来栄えだったために記録に収めたことが想定でき、今後も所在を含めて調査を継続することとしたい。また、同地での他の作例としては、「十一月十日」の書込みのあるスケッチ（図11）があり、関連作（図12）とともに、同日付の日記にある「三時頃から宿の前の椰子樹を画く」との記述に関係するものであろう。さらに、11月10日付日記の「牛（黄牛）」を写生するために「海岸ニ」出かけたとの記述から、スケッチブックA中、図9の数頁後ろに書き込まれたスケッチ（図13）や、樹下に牛の佇む椰子の木立とその遠方に水辺が覗く図14（口絵4）も、高尾滞在中の制作であることを念頭に今後検討を重ねたい。

11月11日には台南に移動。宿は「停車場前」の東屋旅館である。わずか2日間の滞在中には、女学校での児童の屋外写生を参観、また図画教員らを対象とした講演も行った。制作の記述は「孔子廟にて水彩を画く」（12日付日記）とあるのみだが、（孔子廟の）「建物、庭の具合甚だ好し」との書込みは制作を企図していたとも思われ、描画内容から図15¹⁹が同所を描いた可能性がある。また、取材地や年記等はないものの、孔子廟の大成坊と考えられるスケッチ（図16）も確認でき、水彩画に関連して描かれたものと思われる。

台湾滞在中も終わりに近づいた11月13日には古都・台南を発ち、彰化、鹿港を訪ねて、再び台北に戻った。台北郊外の北抜のほか、石川欽一郎に誘われて近隣の新北市板橋区にある林本源園邸²⁰を訪問。同地を描いた作品が現存する（図17／口絵5・図18）。両作品とも鉛筆素描に彩色をほどこした水彩画で、画中に取材地の書込みがある。明暗のコントラストが明るい陽光を伝え、素早い描写のなかに伸びやかさも感じられるみずみずしい作品に仕上がっている。

台湾では、視学官や学校教員など教育関係者の知遇を得たほか、美術家としては上記・石川ら台展審査員に加え、楊三郎²¹や倪蔣懷²²（11月14日～16日付日記参照）、杜添勝（同10月28日～31日、11月4日）ら、台湾出身の画家とも交友を結んだことが知れる。楊三郎とは淡水で面識を得たようで、塩月らも交えて台北で写生、また知人の別荘に出かけたほか、彼の自宅を訪問。そもそも楊が画家を志したのは少年期に見た塩月の作品がきっかけともいい、あるいは塩月を介して知り合った可能性も考えられる²³。審査用務だけではなく、様々な人々との交流や名所・旧跡訪問、各地での制作と充実した日々を過ごした南は、11月17日に吉野丸に乗船。約一か月の滞在を終えて帰途に就いた。ちなみに、南と台湾とのつながりはその後も途絶えず、台湾滞在の2年後に東京美術学校教授に就任した南は、同校において台湾出身の画家・廖徳政を指導したことが伝わっている。近年、台湾で開催された『台湾早期西洋美術回顧展』（1990年2月10日～4月8日 於：台北市立美術館）は、1895年～1945年の半世紀の間に、日本が台湾の洋画に及ぼした影響に焦点を当てた企画で、台湾洋画界の発展に寄与した両地の代表的作家が取り上げられた。出品作家は、美校で学んだ陳澄波や郭柏川のほか楊三郎や廖徳政ら台湾の画家25人と、南をはじめとする日本の画家12人で、同地において、南が台展の審査員としてのみならず、台湾の近代洋画史の形成に関わり、影響を与えた日本人画家のひとりとして位置づけられていることを示したものと見えるだろう²⁴。

おわりに

当館は一昨年度、御遺族より94点の作品を新たに寄贈いただく機会を得るとともに、新収蔵品の中から、画業の各時代を代表する主要作品を昨年度の所蔵作品展の特集展示において公開させていただいた。事前調査に御協力いただいた際、ヨーロッパやアジア各地など海外に取材した水彩画に注目されるものが多く²⁵、異なる文化や風土に触れた感興が、画面に生命感を与えるとともに画業をより豊かにしてきたことを改めて実感した。本稿で紹介した水彩画の多くもこれらの調査で初めて実見できたもので、その後寄贈いただいた作品も含まれている。かつて石川欽一郎が、「規模の雄大、色彩の壮麗變化の巧妙」に瞠目し、「實に自然の造れる傑作」にして「日本一の風景」²⁶とまで語った台湾の景観に接したことは、風景画を本分とした画家にとって、制作意欲を高めるまたとない好機であったと思われる。今後も、アジア地域での制作、殊にいまだ十分に紹介できていない朝鮮半島での活動や作例に注目しつつ、制作状況や交友を紐解きながら作品への理解を深め、個々の作例の画業の中での位置づけに役立てたいと考えている。

【註】

- 1 3月1日～3日の日記によると、参加者は赤城泰舒、小山周次、丸山晚霞、望月省三ら二十数名。宿は、望月の紹介と見られる当時新築中だった江澤館。滞在中、仁右衛門島に渡るとともに、宿の三階から皆で制作したとの記述がある。
- 2 5月7日付日記によると、金山平三と大石田に同道の予定が、体調不良のため金山に遅れてこの日に東京を発った。翌8日に現地着。宿は榎本旅館。滞在中には、梨花や町はずれの小川、林檎樹、農家、地元の女性などを題材に制作したとの記述がある。5月15日に同地を発ち、東京に戻るのは翌16日である。
- 3 館山では、汐入河畔での制作についての記述があるほか、訪ねてきた金山平三とともに千倉でも制作。8月17日には、岩村透の銅像除幕式に出席するため三浦三崎を訪れ、8月29日に東京に戻っている。

- 4 同書は、用具、実物写生、構図、調子などの項目立てによる概論から、静物、風景、人物、動物などモチーフに沿った解説までを説いた実践的な水彩画の指導書で、1942年までに14版まで発行、さらに増訂改（1942年）、再改訂版（1949年）が刊行されるなど版を重ねた。
- 5 第3回松方氏蒐集絵画展覧会（1930年5月17日～6月4日 主催：国民美術協会 於：東京府美術館）。南は5月30日に会場を訪れている。
- 6 第4回台展は、1930年10月25日～11月3日まで台北・総督府旧庁舎で開催。台湾美術展覧会は1927年に第1回展を実施し、日中戦争のため中止された1937年をのぞき1943年まで全16回開催。本稿では、台湾教育会の主催により1936年まで開催された台湾美術展覧会（略称、台展）に対し、1938年以降、台湾総督府が主催した台湾総督府美術展覧会を「府展」と略称する。
- 7 児島薫「朝鮮美術展覧会、台湾美術展覧会の「内地」からの審査員について」『東京・ソウル・台北・長春―官展にみる近代美術』（福岡アジア美術館、府中市美術館、兵庫県立美術館 2014年）pp. 192-194。南は、1925年、1926年、1936年、1942年の朝鮮美術展覧会の審査員を務めている。
- 8 森美根子『日本統治時代台湾 語られなかった日本人画家たちの真実』振学出版 2018年 p. 106。
- 9 正木直彦『十三松堂日記』（1928年9月23日付）。註8より参照。
- 10 勝田蕉琴（1879-1963）。福島県出身。会津の野出蕉雨に師事し「蕉琴」の号を受けた後、東京の橋本雅邦の門に入る。1905年に東京美術学校日本画科選科を卒業後、農商務省海外実業練習生としてインドに渡る。1907年に帰国し、第1回文展に出品。以後も官展を中心に活躍を続けた。
- 11 郷原古統（1887-1965）。長野県出身。1907年東京美術学校日本画科に入学、後に師範科に転入し1910年卒業。美校入学前には、一時、白馬会葵橋研究所で岡田三郎助に洋画を学んでいる。1917年に台湾に渡り教員として指導にあたる。1936年に台湾を離れるまで、台展のすべてに参加した。郷原以下、木下、塩月の略歴は、次の文献を参照した。：『東京・ソウル・台北・長春―官展にみる近代美術』展図録（前掲書）、『日本統治時代台湾 語られなかった日本人画家たちの真実』（前掲書）
- 12 木下静涯（1887-1988）。長野県出身。1903年に上京。1909年、竹内栖鳳の竹丈会に参加。1919年に台湾に渡る。1930年には台展審査員の郷原古統とともに梅檀社を結成、後進の指導にも当たった。1946年まで淡水に在住。
- 13 石川欽一郎（1871-1945）。静岡県出身。1891年、明治美術会に入会。浅井忠や川村清雄らに学ぶ。1913年、日本水彩画会の創立に参加。台湾には1907年～16年、1924年～32年の2度に渡って滞在、台湾の美術教育や近代洋画の発展に貢献した。
- 14 塩月桃甫（1886-1954）。宮崎県出身。1912年、東京美術学校図画師範科卒業。1921年に台湾に渡り、教員として勤務。台展の創設に参加し、審査員を歴任した。1946年に帰郷。
- 15 幣原坦（1870-1953）。教育行政官。1913年から7年間広島高等師範学校の第二代校長も務めた。幣原喜重郎の兄。
- 16 南の日記には、吉野丸乗船の2週間ほど前に勝田の訪問を受けていたことが記されている：「今秋台湾の展覧会の日本画の審査二行く勝田蕉琴氏来訪」（1930年9月29日）。
- 17 日記原文には「日の丸館」とある。南の自筆の住所録には、「日の丸旅館」「臺北市明石町二丁目」と記されている。
- 18 1895年、台湾総督府が清朝時代の「東瀛書院」を娯楽施設として改築・創設した「淡水館」を、1898年に「公会堂」として一般の人々に解放し、以降、同所は台北地区の日台の文芸活動の拠点となって書画展などが開催されたといい、南の日記に登場する「公会堂」はこれに当たると考えられる。：『日本統治時代台湾 語られなかった日本人画家たちの真実』（前掲書）p. 17。
- 19 本作の所在は不明。作品図版は図10と同一のスクラップブック所収。画面左下にサインとともに「1930」の年記がある。
- 20 塩の専売や貿易等で財を成した林本源家の台湾を代表する庭園。台湾の国定古跡に指定されている。
- 21 以下、楊三郎と倪蔣懷の略歴は、『東京・ソウル・台北・長春―官展にみる近代美術』（前掲書）を参照した。楊三郎（1908-1995）。台北出身。京都市立美術工芸学校を経て関西美術院に学び、1928年に卒業。1932年に渡仏。1934年に台湾に戻り、台展や府展、また春陽会でも活躍した。

- 22 倪蔭懷（1894-1943）。台北出身。石川欽一郎の最初の教え子。七星画壇、台湾水彩画会、赤島社などの団体を企画・賛助。また台湾絵画研究所を創設するなど、台湾の初期近代美術史の発展に寄与した。
- 23 画家志望のきっかけについて、「小学校の頃、通学路の途中にある文房具の店外に陳列していた塩月桃甫（本名：善吉）の油絵に影響を受け、画家を志す」と述べられている（新北市・楊三郎美術館ホームページ <https://www.yangsanlang.com/tw/jp>）。
- 24 同展図録（p. 90・p. 173）によると、廖徳政（1920-2015）は1940年から46年まで東京美術学校に学び、在学中、南と安井曾太郎の指導を受けたと記されている。南は1943年に美校教授を辞任しており、同時期までの指導と考えられる。なお、同展で取り上げられた日本人作家は、台展や府展の審査員を主とする12人で、有島生馬、石川欽一郎、梅原龍三郎、大久保作次郎、岡田三郎助、斉藤与里、塩月桃甫、辻永、藤島武二、南薫造、吉村芳松、和田三造である。
- 25 南の渡航は、東京美術学校卒業後のヨーロッパ留学（1907～1910年）に始まり、台湾のほかにも、インド（1916年）、朝鮮半島（1925年、1926年、1936年、1942年）、中国（1939年）などアジア各地に滞在。主に水彩による風景画を残した。
- 26 『日本統治時代台湾 語られなかった日本人画家たちの真実』（前掲書）p. 43。

【謝辞】

本稿の日記原文と関連図版の掲載については、南薫造御遺族並びに渋谷区立松涛美術館の御高配を賜りました。とくに御遺族の皆様には、事前調査の段階から貴重な作品の御寄贈に至るまで多大な御理解・御協力を賜りました。末筆ながら記して御礼申し上げます。



図1



図2（口絵1）



図3



図4（口絵2）



図5（口絵3）



図6



図7



図8

■淡水周辺に取材したと考えられる作品（図1～8）

図1 「昭和五、十月廿三日 淡水」（スケッチブックA）

図2 〈口絵1〉《台湾風景》1930年 油彩・板 40.8×31.8cm
広島県立美術館蔵

図3 スケッチブックA

図4 〈口絵2〉《台湾風景》1930年頃 水彩・紙 32.5×48.8cm
渋谷区立松濤美術館蔵

図5 〈口絵3〉《台湾風景》1930年 水彩・紙 32.0×48.2cm
広島県立美術館蔵

図6 《風景》1930年 油彩・板（裏面に「風景」の書込み）

図7 《淡水にて》1930年 水彩・紙 33.0×49.4cm 渋谷区立松濤美術館蔵（画中に「昭和五年十一月 於淡水」の書込み）
（1931年の第18回日本水彩展出品作《廟の門》か）

図8 《淡水》第19回日本水彩画展（1932年）所在不明

※作品名の表記について：美術館収蔵品は各館の登録作品名を記した。その他作家の自筆の書込みがある場合は「」を付し、関連情報も含めて（ ）に記した。



図9



図10



図11



図12



図13



図14 (口絵4)

■高尾周辺に取材したと考えられる作品(図9~14)

図9 「五年十一月七日 高尾渡船場」(スケッチブックA)

図10 所在不明

図11 「昭和五年十一月十日」(スケッチブックB)

図12 スケッチブックB

図13 スケッチブックA

図14 (口絵4)《風景6》水彩・紙 1930年頃 30.8×46.4cm 広島県立美術館蔵



図15



図16



図17（口絵5）



図18

■台南（図15・16）及び、台北から訪ねた林本源園邸（新北市板橋区）に取材したと考えられる作品（図17・18）

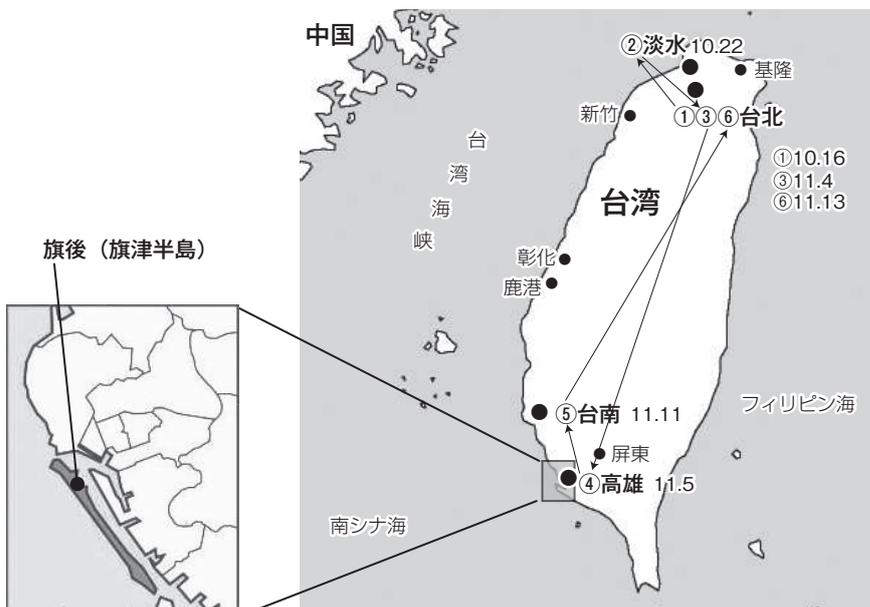
図15 所在不明

図16 スケッチブックA

図17（口絵5）《林本源邸》1930年 水彩・紙 23.3×31.5cm 広島県立美術館蔵（画中に「昭和五年十一月十五日 於林本源邸」の書込み）

図18 《林本源庭園》1930年頃 水彩・紙 24.0×32.2cm 渋谷区立松濤美術館蔵（画中に「林本源庭園」の書込み）

■図19 台湾滞在中（10月16日～11月17日）の主な滞在地と到着日



- ①10.16台北（10.21日帰りで淡水訪問）
- ②10.22淡水
- ③11.4台北
- ④11.5高雄（旗後※旗津半島や屏東を訪問）
- ⑤11.11台南
- ⑥11.13（彰化、鹿港を経て）台北（林本源園邸を訪問）

※宿泊先を基準に、主な滞在地と到着日を図示した。また宿泊先を拠点に、足を延ばして訪れた地域や制作地を（ ）で付記した。

日記原文

※台湾に出発する1930年10月12日から、帰途に就くべく吉野丸に乗船する同年11月17日までの日記の主要部分を掲載した(原文は縦書きである)。

本文中の□は判読不能の文字を、□内の文字は、判読の可能性のある文字を示す。行頭の日付は筆者が付した。

一部には否定的な表現も見られるものの個人的な見解であり、資料性に鑑み原文のまま掲載した。

1930.10.12 十二日(日)。曇。台湾行準備。昨夜のラディオ、今朝の新聞紙にて洋画入撰の発表あったるニより及落の人來訪者多し。(中略)夜八時二十五分急行にて神戸ニ立つ。見送り家内一同、通久君、中田君。(自働車二台)

1930.10.13 神戸
十三 月 快晴。寝台車にてよく眠る。びわ湖附近にて目醒む。八時四十分過ぎ三宮二着。日高綱児君を訪ふ。十時半頃一緒ニ船ニ向ふ。船は吉野丸。(此ノ会社の社員にて綱児君の甥の省三君と云ふがあり荷物など世話をして呉れたり)十二時出帆。テープ多し。日本画の方の審査委員として行く勝田蕉琴氏も十一時頃乗船。天気よき為め港外の景色甚だよし。パターベビーを寫す。船長菅團三郎氏、事務長崎山正夫氏、早稲田大学総長高田早苗氏も同船也。多度津沖にて日が暮れ今治沖は九時過ぎになりたり。今治の燈火美し。吉野丸は元独逸船な□を世界戦争の為に日本によこせしもの也と。勝田氏、事務長と相談してボーイの心つけ左の如くす 室ボーイ(十円) 食堂ボーイ(三円) 風呂ボーイ(二円)。小生も之れにならひ同額にして渡す。

1930.10.14 門司
十四(火)快晴。六時半起床すれば早や門司近かくにて船の歩みのろし。八時半頃門司ニ投べう。もやにて見通せざりしが次第ニ散じて小汽船□るか如き美しき光景見ゆ。ランチにて一寸上陸。町を散歩し端書を出し、ひげをそり十時半帰船。十二時出帆。食後事務長など六人にてデッキゴルフをする。三時頃より野球中継ラヂオを聞く法政、早稲田の決勝戦。一対一にて延長戦ニ入り早稲田が更らに一点を加へた處でラヂオ止りたれば結果は知らず。夜勝田氏とスモーキングルームにて碁をやる。恰度よき相手なり。十時半頃日の丸(旅館)ヨリ無電。

1930.10.15 上海
十五日。(水)晴。六時半頃起床。今日も穏やか。追風。今日は島かげ一つも見ず。トロール船にや時々二隻づゝ、少しく離れて波間ニ上下するを見る。朝食後デッキビリヤード、少しく□□し、午後またデッキビリヤードをして夕食迄ニ及ぶ。夜三等船室の方で余興有りとのコナれど行かず。大波の音聞ゆ。

1930.10.16 基隆 台北
十 十六 水 雨 夜の明けざる前に目醒め、明るくなりて再び眠る 七時前起床。甚だ蒸し暑く昨夜も少々寝苦し。船少しく動く。朝食後理髪室ニ行きしも船動きて心持悪しく直ちに飛び出し籐椅子に横になる。十一時前になり船長、事務長などに頼まれし画帖を試みんとせしに既に昼食の時間(今日は特に繰り上げて十一時半)とな

り之れは宿にて画くとして食堂ニ出る。小さな島を左に見る。復た前方ニ見る。基隆も近かつく。此附近白浪しきりにて船動く。雨降り出す。一時半着。新聞記者、石川欽一郎氏などに船中で會ふ。下船。宿、日の丸の番頭來たる。市役所の小船にて上陸。直き前の停車場に行き三十分汽車を待つ。三時過ぎ台北ニ着。停車場前で新聞社のフラッシュを浴び、鉄道ホテルに催されたる、展覽會関係者の小集ニ出席。また石黒君ニも會ふ。石黒君の自動車にて同乗 日の丸屋ニ送らる。湯に入り食事を済まして座談會と云ふのへ招かる。此所で台湾風物の活動寫眞を見て、會の終る前に退席して帰宿。宿にては蚊帳をつる。

- 1930.10.17 十七 金 祭日。未明に目醒む。十時頃石川欽一郎氏來訪。之れより台湾神社參拜。（三人自動車同乗）幣はく料拾円（共同にて）を供ふ。帰途旧政廳の會場ニ向ふ。之れは清國時代の建物で年数は五十年位のものなれに甚だ古び数百年前の建物の如き觀を呈し、中庭其他中々によし 正門より内に入りし所ニ兩側ニ芝草の庭ありて右にはビンロージ(?) 左には紫色の花、赤い果の木あり。水彩画などニ画くに甚だよし。間取りを見、宿ニ帰る。二時半基隆行の汽車で平山寅次郎氏内地に出發とのにて停車場ニ行き、會遇しまゝ送る（二三時間前 宿を訪はれし由、宿よりの話しあつたれば此事を知れる也）栄町一丁目西尾寫眞機店ニフィルムの入代へに行く 六時より大学總長幣原氏（審査委員長）官舎ニ於て審査打合せ會あり、後ち饗應（日本食）台湾の歴史につき種々面白ろき話ありたり。十時半帰宿。勝田、郷原、木下（以上日本画）、石川欽一郎、塩月、及び小生（西洋画、）他に杉本副會長、主人 合計八人
- 1930.10.18 十八 土 晴。鑑別。
朝石川君來宿。九時三人で宿を出で政務長官人見氏の官舎に挨拶ニ出かく。（名刺を置いて置く） 府廳ニ行き杉本文政局長、石黒君（内務局長）に挨拶。其前幣原大学總長の官舎ニ行き挨拶と昨夜の礼を曰ふ（主人留守）十時半ニ會場ニ出かけ十一時頃より鑑別ニとりかゝる。總数五百六七十点にて五時前に一通り目を通し二百点余の再[○]を決めて帰宿。夜ぶら〜町を散歩す。
- 1930.10.19 十九日（日）八時半會場。鑑別終り七十九点入撰。
- 1930.10.20 廿日（月）審査委員の會食（鉄道ホテル）全夜（裏面ニツヅク）石黒君官舎ニ招かれ、一同行き十時頃帰る。
- 1930.10.21 廿一 火
朝 関水に初めて行く。宿舎になる可き倶楽部を先づ見、英國領事館の紅毛城（三百年前和蘭陀人建設）を見物す。それからゴルフリンクに出かけキアディマスターと一巡す。風景絶佳。ピトレスクなり。午食は海水浴場（郡守西村□一氏、街役場助役？の李と云ふ青年、及び木下氏と四人）三時四十分頃の汽車で台北に帰り夜は政務長官人見氏（教[○]會長）の招待會（官舎、台湾料理、二十人位）
- 1930.10.22 廿二日（水）台北ノ宿 日の丸館を引き上げ、勝田氏は令弟の家に拙者は淡水の公會堂ニ行く（十二時五十分汽車）リンクに行き半ラウンドする。非常ニ暑し。
- 1930.10.23 廿三日（木）朝水彩画を庭前にて画き午后の新聞記者招待、出品者招待ニ出席。

- 1930.10.24 廿四日(金)朝六号を廊下より画き午後西村郡守とリンク一廻り 54 49なり。夜西村氏の晩食に招かる。木下氏も同席。十時迄居る。ゴルフモナカ進呈。
- 1930.10.25 十 25 土 晴天。朝二十五号を初む。公會堂前庭より下方を望む。十時頃迄やって一寸眠る。午後リンクに出かける。石黒君来て廻る。成績甚だ悪るし。夜散歩す。人形芝居あり。
- 1930.10.26 二十六日(日)晴。朝六時半より庭前二十五号。リンク行の自働車、前を通るヲしきりなり。十時頃リンクに出かく。練習の爲め二三ホール廻りて昼食。午後石黒、川村(台日)両氏と廻る。川村氏とは二三年前駒沢にてプレーせるヲあり。出来昨日二次ぎて悪るく川村氏ニは負、石黒君にはタイなり。夜吉田耕三と云ふ青年来訪(先日台北にて會ひし人、二科への出品者)九時頃より暗い山の上の町を散歩して帰る。
- 1930.10.27 二十七日(月)晴。暑し。七時より庭前、十一時より税関横のジャンクを六号に画く船をパテベビーにて撮る。
- 1930.10.28 二十八日(火)朝庭前寫生。十一時頃ヨリがけ下の白い家を水彩にて画く。午后山上の西洋人の経営せる女学院の運動會へ公會堂のキーパーに誘はれて行く。此の丘上の洋館、土塀ど中々美し。夜、杜添勝と云ふ台湾人(画を描く人)及び木下氏と町の寺内の芝居を見物ニ行く。
- 1930.10.29 二九 水 今日の新報紙は霧社ニ於ける□□蜂起の事を傳ふ。殺されしもの、二百名位とのヲ。七時頃起床の爲め庭前のを休む。郡の庶務課長(中村)より電話ありてランチに乗る様誘はる。直ちに同氏来宿。役所裏のランチに出かく。西村郡守夫人も同乗。淡水河を上下す。風光甚だ美し。パテベビー四本ばかり寫す。木下君 台北資生堂の娘と云ふ未亡人と共ニ来訪。其處へ大学の後藤と云ふ人(東洋哲学)来訪。但し木下君を□□□、〇を以て寫生に出る。市場に至り丘を見上げて寫す。市場内飲食店内ニ杜君寫生中なり。午後四時半より十二号二日目を画き、直き傍の路傍ニ行く。夜公會堂□□郵便局長送別會とかにて賑やか也。杜君来訪。(昼の時は昨日□□し古時計を持って来て呉れる。價一円八十錢)種々台湾の話をする。其の内に船いう靈いに類するものあり。一ハ海和尚で他は小便婆。海和尚は帆柱の頂点ニ来て笑ひ、小便婆は帆柱の頂ニ来て小便をして船を充たし沈没させると云ふ。舟人其の時マソ(海の女神)の名を書ける大旗を振って之れを拂ふと云ふ。ヂヤンクに赤色三角形の大旗を擧げ居るを今ま見るが之れが其旗なり。
- 1930.10.30 卅 木 朝雨。午后曇 (霧社□□の事件新聞紙上を賑はす)起きがけ非常な雨声を聞く。廊下よ里下の人家を水彩にて画く。十一時頃より税関ニ行きてジャンクを油絵六号ニ画く。船は新装にて甚だ美麗也。一時過ぎ杜君来訪。海岸の□の村(燈台の所在地)の祭礼を案内すると云ふ。今日はバス通ふ。男女多数参詣。亀形の印ある赤餅に線香を挿し込み、之れを受けて帰る。福德をさづかる爲めと云ふ。来年ハ二個奉納する義務ある由。神前ニは種々の馳走を□べ、礼の冢も供へられたり。堂の左側ニ煉瓦造りの煙突あり之れに金銀紙を投じて焼く人も多し。芝居も初まりさうなりしが燈台附近を見て再びバスに乗りて帰る。夜公會堂ニ於て淡水小、公学校、女学院、神学

- 校、青年會などの學藝會の催しあり。六時過ぎより九時前迄なり。入場して見物す。
- 1930.10.31 卅一日（金）曇。七時頃より庭前にて寫生。夜木下氏の招待七面鳥すき焼き（公會堂二階）台北より石川欽一郎、郷原、塩月、小塚（文具店主）吉田（青年）の諸氏、淡水よりは郡守公医、吉岡老人、杜の諸君及び小生招かる。石川、郷原二氏ハ帰北、後□□地ニ滞留。
- 1930.11.1 十一 一 土 雨。細雨しきりにて寫景ニ□る 朝廊下より一枚、後ち郵便局前□□古い家を水彩淡彩にて、午后三時頃より雨止みたれば十二号を続けしも風の爲めニ筆進まず。夜 郡守、庶務課長、視学、街助役、木下氏を招き夕食（キーパーの手料理鯛ちり）
- 1930.11.2 二日（日）雨。天候前日ニ同じ 寒冷なり。朝二階より北の海を□□画き、午後廟を水彩にて。
- 1930.11.3 三日（月）明治節。小雨曇。郡守より電話にてリンク行を誘はる。十時頃より一ラウンドす。午後ハ西村郡守と小野氏（總督府土木）の三人にて廻る。今日はスエーターを着用す。スコア少々宜し102 103。プロ陳 一昨日内地より帰る。先日のイバラギオープンにて三等を得たり（Iハ宮本、IIハ安田）新進有望の声高志し。夜荷造り。明日此地を離る、爲め也。台北より中学教師二人他一人絵を持参、大ひニ劳かれたり。
- 1930.11.4 四 火 曇。小雨。寒冷。朝 諸所をそれ〱廻りて挨拶。午后二時の汽車にて台北ニ立つ。見送り郡守、庶務課長、視学、街助役、木下、杜の諸氏、台北にては日の丸館ニ入る。総督府にて文教局長、石黒内務局長ニ會ふ。石黒君は昨日霧社より帰りたるばかりなり。惨状を話す。会場ニ一寸出頭（昨日閉會）。夜石川君来訪。墨をもらう。
- 1930.11.5 高尾港 宿 壽旅館
五 水 台北。雨風。寒氣。新田以南晴。
夏服だけでは寒むく春外套を着て朝八時の高尾行き急行ニ乗る。此汽車に軍装せる巡查数人乗りたり（台中にて下車）途中、林や町のある場所は面白ろき風景なれども、米田、砂糖木の畑の處□□海岸など余り変化なし。台北に近かき小さき町にて川に沿ふ處あり 中々面白ろく、行って見る價值あり（一時間以内の處と覺ゆ）二川庄は霧社に行くに下車する處にて何かゴタ〱して居りはせぬかと前より思ひ居りしも恰度此辺り眠りて知らず。五時過ぎ高尾ニ着。出迎かへの人左の如し 視学井上徳弥（教育課長山口尚之の名刺持参）高等女学校 山田新吉、州立中学 皿谷嘉助、第三公学校 鄭獲義、物産陳列場 横山精一、高橋清、の六氏。夜山田君来訪。後ち浴衣にて散歩少し寒むし。
- 1930.11.6 高尾
十一 六 木 晴。暑し（八十五度位ならむか）
九時州の自働車が来る約束につき用意して少しく早やく町に出て停車場附近を撮影。井上視学、山田、皿谷の三氏来。自働車にて次の道順にて見物。高尾山（壽山）に登る途中今上天皇の皇太子の御時の御座所あり。更らに甍々たる坂路を頂上に登る標高

一千百何十尺。高尾湾、外洋、米田、水路など一望の内にあり 東に大武山(一万尺余)が霞みて見へ米田は色つき砂糖木は緑なり。ジャンの帆を張りて港口に向ふを足下に見る。山は一面さんごせう岩たりと云ふ。相思樹の森甚だ美し。此処□は野猿を時二見ると雖も遂に見ず。下山 高尾神社参拝。海水浴場。トンネルを潜り埠頭を廻り(此所にて撮影)新市街地を川迄行きて引き返し宿ニ入る。宿にて山田、皿谷の二君と共に昼食。埠頭よりサンパンを雇ひ對岸旗後に渡る。湾内海色甚だ青く赤い帆、朱体のサンパン、ジャンクなど実ニ美し。岸にて多く撮影。廟前の路店甚だ面白ろし。旧街を通る。幅一間位の不規則の町にて殊に趣あり。町を抜け燈台のある山の中腹ニ登りて湾内を見る。又た此所より外洋の打ちよせるを見る。サンパンにて信号所下ニ渡り信号所(旧砲台)ニ登る。外洋から入り来る帆船、汽船眼下を通りて面白ろし。山下の古き部落哨船町の裏通りを潜□、不潔なれに愉快也。渡船場よりバスにて帰宿。夜散歩 渡船にて旗後に渡る。満月浪に砕く。

- 1930.11.7 七 金 晴。暑し(八十五度位ならむ)
朝七時前岸壁に行きサンパンの罫べるをハンドスケッチする 帰りて朝食。十時頃より旗後に渡り船つき場を小板に画く。後ち少しく位置を換へてま□一枚画く。魚市場近かく、時々運び来る魚を市にかく。語調日本在来のものと全く同じなり。サバの如き斑様□色合にて黒ハギヨリも扁平なる魚多し。乗合サンパンにて帰る(渡銭料三銭は安し)赤き帆を張りて往復するサンパン甚だ見事なり。風よく、よく走る。四時より水彩道具を持ちて信号所下ニ行き對岸の赤煉瓦と白壁の窓を中心として画く。夜物産陳列場の横山氏来訪。共に絵具屋ニ行き画布を命ず。物産屋、古物屋ニ廻る。
- 1930.11.8 八 土 晴暑し。七時頃から岸壁(商船会社)を八号ニ画く。サンパン発着場、十時帰る。郵便局にて岩見譲送りの二百円為替を組む。一寸午睡。午后州廳に知事を訪ふ。二時半旗後に渡り船着き(煉瓦家を一寸入れて)場を八号ニ画く。見物人多数にて閉口、五時終る。昨日入港せし和蘭陀の大汽船 今日港口を出て行く。夜、本島人の町ニ散歩。市場附近賑やか也。(後略)
- 1930.11.9 九日(日曜)高尾神社の祭礼とかにて日の丸の提灯がつるされ、バスは小旗をつけて走る。八時十七分の汽車で屏東ニ行く。(約一時間)停車場ニ平山氏出迎かへられたり小生乗車後電話をかけ小生の行くを知りたりとのり也。製糖会社ニ向い、端□工場(砂糖とアルコール)を見て昼食。後自動車にて氏の社宅、町、公園、神社、それから□屋を見る。スレートの屋根、壁、床張り也。折よくも西□の若者十人ばかり来て居り。昼食中なり。屋内ニ居るもの、前のガジマル大樹の下の一段高く石を畳まれたる台上ニ息むもの等、例のパイプにて喫煙す。中々シャレタル衣裳をつけ居る。市場を見て二時の汽車ニ乗る。平山氏も共に乗車。高尾にて中村と云ふ人(倉庫の支配人)出迎かへ、共に宿にて暫時休息し旗後にスケッチ行く 二人も一緒にハンドスケッチ。夕方帰り直ちに台湾料理屋にて夕食。後ち宿の前にて別かる
- 1930.11.10 十一 十月 晴。
ゆっくり寝て七時頃起床。食後スケッチ箱を携へ海岸ニ出る。牛(黄牛)を寫□スル

爲なり。沢山居るも具合のよきものなく岸壁附近を歩るき廻る。暑し。町ニ戻りて材木置場附近にて寫生。帰途 物産陳列館ニ横山氏を訪い此所でステッキ二本（あづさの木）巻煙草四個を求む。三時頃から宿の前の椰子樹を画く。夜 山田、井上、横山、鄭、□の二人の公小学校の画の教師来訪。十時迄居たり。

1930.11.11

台南

十一日（火）晴。八時の急行で台南に出発。山田、横山両君見送り。（及宿主婦）九時五分台南着。清水課長、視学、第一高女校長、陣内、他数名学校教師の諸君出迎へ。停車場前 東屋旅館ニ入る。十時頃より陣内君と共に町に出づ。博物館前を通り孔子廟ニ行く。此の建物、庭の具合甚だ好し。公学校ニ廻り其の裏にあたる^(マ)楼を見物。此所は三百年前和蘭陀の政廳なりし處なり。当時の建物はなく煉瓦にて一丈ばかり積み上げられたるが当時の遺物にて後年清朝が之れに廟を建てたるもの現今のものなり。市中を望見す。帰り陣内君と共に宿にて昼食。公園を経て帰宿。午後第一女学校に市内諸学校の国画教師及び校長會合し坐談を頼まれ行く 女生徒の石膏、屋外寫生を參觀。中々充分なる教育法なり。三時半帰宿。夜^(マ)陣内君と町を散歩し本島人の多数集まりたる露店の多き處に行く。（後略）

1930.11.12

十二 水 曇。風。稍々寒冷 九時ニ州の自働車が来る。案内者役の第一高女の国画教諭^(マ)君小生三人を連れて来る。マツ廟（甚だ裝飾多き建物也）大南門を見て安平ニ走る。風吹き稍々寒むし。運河ニ沿って里余走る。此地の船つきは遠浅にて汽船は遙か沖ニ^(マ)泊し、ジャンクのみが此の運河を通して安平ニつく。和蘭陀人時代の西洋建築の荒れたるもの多く残り、平地と場所が広い為め淡水とは亦た別箇の面白ろ味あり。元の和蘭陀領事館の建物 中々面白ろけれども荒れ果てたり（水産学校ニなる筈の由）旧砲台ニ登る。燈台あり。休けい所ニ入りて息む。十一時頃帰着。午後孔子廟にて水彩を画く（朝の連中も此所ニ来て画く）。

1930.11.13

鹿港 彰化

十三 九時過ぎの汽車ニ乗る。見送人 松平第一高女校長、同校御園□君、陣内君、視学等。三時間にて彰化に着。此の間ニ水にて此度の事件の爲めの死者遺骨ニ組乗車。見送りの学校生徒等多数あり。彰化にては台中州視学中川□次郎と云ふ人出迎かへ直ちに会社□の小汽車にて鹿港ニ向ふ。ガタ／＼の汚き汽車にて甘^(マ)畑の中を走る 四十分ばかりで到着。鹿港は往来を屋根にて蔽はれたる本通りで有名である。^(マ)も大きく如何にも堂々として居る。或る貿易商の二階より屋根ニ登りて屋根の構造を見る。鹿港にては陳培□云ふ台湾人案内して呉れる 甚だ要領よく面白ろい部分を引張って呉れる。本通りを抜けて一寸役場ニ行き税関の塔ニ登りて見廻はす。港と云つても名ばかりにてジャンクは二哩^(マ)沖ニ^(マ)泊して居りテッパイを以て貨物を此所ニ運ぶと云ふ。遊女町たる裏町を通る。ポンペイかヴェニス^(マ)の裏町を想起させる様な煉瓦の壁ニ囲はれた町なり。三時頃乗合自働車にて彰化に帰り、孔子廟を見て後ち高等女学校ニ息む。校長、大河原欽吾、国画教諭鈴木千代吉氏ニ會ふ。四時の汽車で台北ニ向って立つ。十一時頃台北着。

- 1930.11.14 十四日。曇。涼し。朝、土産物など買ふ。午後小塚絵具店で楊佐三郎君と會ひ、大稲ていを見物ニ行く。此の人は永く内地ニ絵を勉強に来て居た青年で先日淡水□訪ねたり。市場ニ這入り古懐中時計(三円八十銭)とくさり(八十銭)及びガラス絵(六十銭)を同君ニ値切ってもらって買ふ。後に同君の家ニ行く。酒の卸賣をする大きな商家なり。應接間ニ通り茶菓を供さる。同行者小塚絵具店主、及び吉田君なり。後ちアヒルを寫す可く円山ニ行く。此所へ塩月君来たり 五人で小塚の北抜の別荘と云ふのへ行く(出し抜け也)。十時頃帰る
- 1930.11.15 十五日。朝総督府。午後石川君ニ誘はれ板橋の林本源邸の庭園を見ニ行き水彩画を描く。夜楊君を訪ふ 共にレコードと菓子を買ひニに行く。
- 1930.11.16 十六日(日曜)曇。荷造りせんとする處へ石黒君から電話 淡水リンクへ行かうと云ふ(此朝、倪蔣懷君来訪) 一緒ニ行き河村氏も共ニ三人で廻る。涼しくてよし。K君99、石黒106、小生103 三時帰り、夜更ける迄荷造り。
- 1930.11.17 吉野丸へ乗り帰途ニ就く
十七 月 朝の間ニ左の人々ニ暇間乞ひする。大学にて幣原総長。石黒君の官舎にて同夫人。総督府にて総督、人見長官、石黒、杉本、□等。一時三十分の汽車ニ乗る見送り人左の通り。杉本文教局長、木下静涯、小塚、吉田、楊、資生堂の婦人、勝田氏令弟。基隆迄見送りの人は石川欽一郎、矢野学□諸氏(文教局代理)石黒内務局長及び秘書、倪、宿の若主人の諸氏。四時出帆 吉野丸。(風少しあり直ちニ寝る)

(ふじさきあや／当館主任学芸員)